

この危機から日本中の教会の宣教協力へ！

「弟子たちは—兄弟たちに—救援の物を—バルナバとサウロの手によって、送った。」

使徒の働き11:28-30

被災地の牧師・教会を支援し、東北復興のお手伝いを！

- ①相模原の牧師・信徒が被災地の現地の教会を訪問し交流する。
- ②牧師とそのご家族の支援をはじめとして様々な関わりをもつ。

震災から7カ月が経ちました。相模原・教会ネットワークでは、これまで災害支援プロジェクトとして、被災された教会の牧師家族の支援を中心に、現地の教会や支援団体と協力して被災地の支援活動を行なってまいりました。

特に宮城県、岩手県の津波被害に遭われた教会を訪問し、牧師家族や信徒たちの歩みが支えられ、再び宣教の働きに励むことができるようにと、現地の教会の支援に取り組んでまいりました。

半年余りが過ぎた今、被災地では、ほとんどの方が避難所から仮設住宅へと移られ、求められる支援も、次の段階に入ってきています。食料品や物資などを緊急に必要としていた頃よりも、今は、被災状況や家族構成などに応じた個別の対応が一層求められ、通勤(通学)、医療、雇用、住居等生活面の課題と共に、心のケアやコミュニティの問題も重要性を増しております。また福島第一原子力発電所周辺の住民の方々は、放射能汚染により、長い間住み慣れた土地を離れて生活されており、少し離れた地域でも、放射能の除染に苦闘しておられます。

こうした沢山の課題と甚大な被害を前に、自分たちの無力さを覚えるばかりですが、私たちはなお、このことの上にも、主の慰めと導きがあることを信じて、自分たちのできることを、心を込めてささげていきたいと思えます。

被災されたそれぞれの教会も、色々な課題を抱えつつも、新しい場所への移転など再建に向かって歩み出そうとされています。そしてこの苦難と悲しみの中から、たくさんの方々が神様に出会い、信仰に導かれていることを伺っています。

私たち、これからも主にある神の家族として、被災地の教会の課題を共に担い、教会の働きを通して、被災者の方々が神様の慰めと励ましを受けることができますように祈り続けていきたいと思えます。

皆様のこれまでのご支援に心から感謝申し上げますと共に、これからも祈りを合わせ力を合わせて、被災地の教会の支援にご協力いただけますよう、宜しく願い申し上げます。

以下に、最近の被災地の様子と、この夏の支援活動の報告を、まとめてさせていただきました。

お読みいただき、更なるお祈りとご支援を賜れましたら幸いです。

義援金 振込口座 ゆうちょ銀行 10010 22932431

(他金融機関からのお振り込みの際は、店番 008 普通 2293243 とご指定ください。)

事務局:相模原グレースチャペル 〒252-0328 相模原市南区麻溝台1519-8 Tel/Fax 042-777-5828

仙台シーサイド・バイブル・チャペル(イエス福音)

シーサイド・バイブル・チャペルの内藤智裕先生と教会員の方々は、現在、「シャンテ」という元喫茶店であった場所を借りて、教会活動を行っています。日曜日はそこで礼拝をし、週日には地域の人々に、くつろぎの場とたましいのオアシスを提供したいとの願いから、コーヒー・タイムがもたれています。現在は多方面からの支援により、経済的にも支えられていますが、将来的にはやはり新たな会堂建設が課題です。続けてお祈りください。

宮城聖書教会・田中時雄牧師(聖協団)

浸水で二階に3日間閉じ込められた後、自衛隊により救出され、避難所生活を送る。教会は水に浸かり、信徒の方二名が行方不明となる。

①教会の1階部分の内部の工事は9月半ばに終わったそうです。しかし外壁はこれからということで何とか雪が降る11月半ばぐらいまでに終わるように願っているそうです。二階の牧師館部分はこれからとのこと。

②他県に避難していた人たちが少し戻ってきたが、家が流されているので仙台に住むようになっている。その人たちの為に今後仙台と東松島の両方で礼拝するようになる。

③行方不明になっていた教会員二名が見つかり葬儀を行った。

④石巻、東松島に3、4組の宣教師(在日20年のベテラン)が入ってきて伝道を開始した。この地方が宣教地であると認められて感謝している。

半年経って、今思うとよく生きていたとぞっとすることがあるそうです。

気仙沼第一聖書バプテスト教会・峰岸浩牧師(保守バプテスト)

嶺岸先生は、津波の時、奥様と5番目のお嬢さんと(愛猫と)一緒に高台に逃れて助かりました。山形や横浜など他の地域で生活されているお子様方も、それぞれ無事でした。

就職の決まっていたお嬢さんをなんとか東京まで送り届けた後、気仙沼に戻られましたが、教会兼自宅が流されてしまったため、お嬢さんの親友のお宅や避難所などで過ごされました。今は、中学校の校庭に153戸設置されている仮設住宅の一つで生活され、先生のところに届けられる支援物資(食べ物や日用品など)をトラクトと共に、地域の2000戸の仮設住宅に配布して回っておられるそうです。(福音の種まきと仰ってました。)

礼拝は教会員の営む印刷所(本郷チャペル)を使って、行っておられます。(印刷所も被災して大きな被害を受けたのですが、今はかなりの作業をできるまでに回復してきたそうです。)

教会の再建に関しては、以前の場所の安全が確認されないため、現在、近くで、土地を探しているところだそうです。

教会員の歩みが支えられ、会堂の再建が導かれるように、お祈りくださいとのことでした。

また、仮設住宅での自活のために、食べ物(お米)や日用品(トイレトペーパー)などを、定期的に送ってくださっても助かります、とも仰ってました。

相模原以外の牧師、教団からの奉仕協力

①北本福音キリスト教会 小西直哉先生、優子先生(音楽主事)

②日本キリスト合同教会

③日本バプテスト教会連合・市川北教会 藤原導夫先生

★小西先生ご夫妻が、6月26日(日)いわき市四倉の兄弟団の教会でピアノコンサートとショートメッセージのご奉仕をしてくださいました。

★藤原先生が8月28日(日)日本同盟キリスト教団の磯原教会で礼拝の御用をしてくださりました。

「Samaritan's Purse Japan」のボランティアに参加して 田園教会 伝道師 鈴木手以

8月15-18日、教会の青年たち4名でサマリタンズパース(SP)のボランティアに参加してきました。登米市にあるベースキャンプに宿泊しましたが、半数以上が海外からのメンバーという、想っていた以上にインターナショナルなキャンプでした。私たちは、二日間、石巻の津波被害のあった家屋の床はがしや泥出しを行ないました。その後、SPの大工チームが修繕に入りますが、この冬までに300軒の家を直す計画だということで、これからもたくさんの人手を必要とされていました。

SPのスタッフの方々をはじめ、世界中のキリスト者たちが、力を合わせ熱心に奉仕してくださっている姿をみて、本当に励まされましたし、私たちも素人なりにお手伝いできることが、たくさんあることを知りました。被災者の方々一人ひとりの負っておられる傷や痛みを、私たち理解することはできませんが、そこに寄り添い、聴いてさしあげることが、何よりも支えとなり、癒しにつながることを示されています。

キャンプでは、メイン師やクロスロードバプテスト教会の荒木兄など、相模原の仲間たちとも出会い、共に奉仕をしました。他にも多くの方々と主にある出会いが与えられ、共に御言葉を分かち合い、賛美し、語り合う幸いな時をいただきました。国を超え、教派を超えたキリストにある交わりと奉仕が、被災地において実現し、尊く用いられています。ここでの協力は、今後の宣教においても続いていくことでしょう。まさに、日本の教会史における新しい主の御業が今、東北から始まっているのです。

また今回、20歳前後の若い方たちと行けたことも感謝でした。これからの社会を担っていく世代が、自分たちが見て、感じたことを、将来の歩みにおいて生かして下さることと期待しています。

次回は、相模原や近隣の教会の仲間たちと一緒に参加することができたらと考えています。



南三陸町を支援するキリスト者ネットワークの集い」

中澤啓介師・鈴木手以師が出席。これまで近隣の教会やキリスト教団体が行ってきた活動の報告や今後の課題についての話し合いがもたれました。

避難所の一つであるホテル観洋を会場に、教会とキリスト教支援団体が行ってきた活動やこれからの課題についての分かち合いがなされました。南三陸町は、役所が被災し、大半が機能しなくなってしまったことから、半年近く経った今も、がれきが片付いておらず、復興の目処が立っていません。

そうした中、震災直後から現地に入り、支援の届きにくい場所一軒一軒を訪ねて助けてきたキリスト教は、住民や行政の方々の信頼を得てきたということでした。8月末の避難所閉鎖によって、これからは仮設住宅での一人ひとりの生活と自立を支え、住民たちと役所の方々が一致して再建に向えるよう助けていきたいというお話でした。

「被災教会と牧師を訪ねる旅（2回）」 聖協団 相模原キリスト教会牧師 石川洋一

今回、中澤啓介先生が企画された「被災教会と牧師を訪ねるたび（2回）」に、私も参加させていただきました。

今回は、「お魚作戦？」とでも言いましょうか、被災者を支援する働きの一つとして、お魚を持って行ったというわけです。お魚の宝庫である三陸海岸に住む人々になぜお魚なの？という疑問がありました。新鮮な美味しいお魚を毎日食べていた人々が、この震災によって、漁にも行けず「美味しいお魚を食べたい」という地域の方々の要望に応える活動でした。お魚は大野教会の信徒の方が伊豆の伊東市で大きな水産干物センターの会社を営んでいると言う事で、そこから300世帯分を調達されたとのことでした。品物は、水産干物センターの方から、私たちが宿泊するホテルに冷凍便で送っていただきました。ホテル観洋では、それを冷凍室に入れて保管していただきました。（詳しい事は、中澤師にお聞きしていただければ良いと思います。）

そのお魚は、6日（金）の午後に旭町コミュニティセンターと言うところで配布させていただきました。

今回の旅行では、中澤竜生牧師と田中時雄牧師の体験をお聞きすることが出来ると予定していましたが、その他にも現地の報告を聞く機会が何回ありました。主だったものとして、中澤竜生牧師の信徒の寺田兄の証し。旭町コミュニティセンターに避難していた幸子さん。ホテル観洋に避難していた76歳のモダンなおばあさん。ホテル観洋の女将・阿部憲子さんから、それぞれお話を聞かせて頂きました。

中澤竜生牧師は、私たちの団体の牧師ですが、仙台でもJR仙山線の愛子という、地理的には、海岸線より少し高い地域で牧会をしている事もあって、地震には遭遇したものの津波の被害から守られました。そのため彼の教会は、援助物資中継基地として用いられ、それを届けるために、毎日2時間かけて南三陸町をはじめ、その近辺の町

まで通って援助の働きしてきました。そして、「災害復旧支援SBSネットワーク」という働きを建て上げてきました。（9/4・クリスチャン新聞に掲載）

寺田兄は、ご自分の救いの証をされていました。やくざの世界にいましたが、イエス・キリスト様によってまったく人生観を変えられたこと。今は、夫婦で中澤竜生先生のお手伝いをさせていただいていることの恵みを証しされていました。

幸子さんは、お魚作戦でお魚を差し上げる場所の旭町コミュニティセンターに避難されていたお婆さまでした。彼女は、私たちの自動車に同乗してくださり、被災された地域を案内してくださいました。その中には、ご自分の住んでいた家の跡や生まれ育った家があった所などありました。

お名前を記憶しておりませんが、76歳のモダンなおばあさんは、鮮やかな黄色のTEEシャツを着ておられました。そこに真っ黒な蟻が一匹書かれていて、小さな字で×10となっていました。「ありがとう」と言うことでしょうか。彼女は、津波によって、家も夫や子供たちも流されてしまい、ホテル観洋に避難しているという事でした。同行された姉妹方がホテルの温泉で湯船に浸かっている時、話しかけたのがきっかけで彼女のお話を伺うことができたのでした。多くのものをなくし、悲しみの中に、なにも話すことが出来なかったが、やっと最近になって話すことが出来るようになったとおっしゃっていました。



ホテル観洋の女将・阿部憲子さんは、実に如才無い女性と思いました。彼女の話は、一言の無駄のない話し方には感心しました。彼女は、太平洋の荒波が毎日押し寄せる岩壁の上に建てられた10階建てのホテルの女将です。あの超大型の津波が押し寄せて来るのが5階のロビーから見えたそうです。聖書のお話にあるように岩盤の上に建てられていたので、今回の津波にも負けずにしっかり立っていました。それでも1～2階はガラスは割れ、全ての物がめっちゃめっちゃになってしまったようでしたが、3階以上は守られ、いち早く営業を始めたと言う事でした。それは、単に金儲けと言うのではなく、この町が活かされて行くためには、人が失われてはならない。ホテルは、その傘下に沢山の企業が生きている。その方々が生きていくためには、ホテルの働きを少しでも早く再開しなければならないと考え方に立って行動されたようです。そして、多くの方々(確か600人?)がそこに避難してこられたと言うのです。

彼女の話聞いてみて、物事を考えるのに、何を優先にするか、優先順位の決め方は、お見事と言う感じで受取りました。自分の感情、実体の認識と共に、将来に対してもどのように行動すべきか、実に感動的なお話でした。

田中時雄牧師・久美子夫人 クリスチャン新聞などで報告されている事ですが、多くのキリスト教団体の援護は、実に大きな助けとなられた事。更にもその援助は、教会ばかりか地域の方々のためにも労していただいた事により、地域の方々の教会に対する感覚が大変変えられてこられたとい



うことでした。これが宣教の流れに繋がっていかれる事を切に願う次第です。

帰路は、いわき市にある教会で礼拝を守るために行動した4人の方々とお別れして、6人は、途中大雨の中、無事に相模原に帰着しました。

映像ではなしに、事実を直視した時、涙腺が非常に甘くなってしまった私は、被災された方々のその心情を思うと自動車を運転しながら、思わず涙が溢れてしまいました。また、警察の機動隊の方々や自衛隊の方々が、泥水の中に胸まで浸かりながら捜索している姿に、ご苦労さん、ご苦労さんと何度も何度もつぶやかずにはおられません。今の自分には、他にしなければならない事があるので、何も出来ないのですが、彼等は、腐敗した遺体を捜索し、見つけたならばその遺体を引き上げ、物凄い臭気の中も、隊長の命令にしたがって次々と行動して、遺族の方々が慰められるようにと真剣に働いておられる姿に、社会の人々に良く仕えてくださっているナァと頭の下がる思いでした。(仕事とは、人々が幸せになれるように仕えていくこと。イエス様も、「人の子が来たのは、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためであるのと同じです。」とおっしゃっています。) 田中牧師夫妻を救助してくださったのも自衛隊の方々でした。腰まで水に浸かりながらボートを引いてきてくださったから、彼等は救助されたのでした。素晴らしいお仕事をしてくださっているなあと深く感動しました。



宮古市の田老地区の食糧配布ボランティア 阿部頼義神学生（相模原グレースチャペル）

8月11日、近藤愛哉先生（盛岡聖書バプテスト教会、3・11岩手教会ネットワークコーディネーター）にピックアップして頂き、そのまま釜石へ2時間半のドライブ。道中は先生と震災の話から牧会の話まで、色々と話すことができました。この日は朝から夕方まで、仮設住宅で、「移動式カフェ」のお手伝いをさせて頂きました。読売新聞でも取り上げられていましたがこの移動式カフェはある宣教師の息子が始めた働きです。彼の名はマイカ・現在ムーディ聖書学院（ミシガン）の4年生で夏休みを利用して2ヶ月間、岩手で奉仕をされています。津軽弁と英語を使いこなす、とても気さくな方でした。彼は日曜以外は毎日仮設住宅のある地域を訪れながら、このカフェを行なっています。

仮設住宅に住む方や子どもたちが続々と集まって来て、コーヒーやジュース、お菓子を食べながら、色々な話をされます。私たちは、被災された方々の話を聞き、また心が開かれた時には、共に祈るというようなスタンスで、このカフェを行ないました。何回か訪れるうちに、聖書の話や、信仰の話に興味を持ってくれるようになって来ていると言っていました。住人の方からは、他の団体とは違い、とてもリラックスできる、など嬉しいコメントもありました。地域のなかに、クリスチャンが自然に入って行っている証拠だと思います。

釜石から、ベース（ボランティアの基地）のある田老まで約2時間、湾岸線に並行して帰る通り道で、震災の爪痕を嫌と言う程見させられました。『こんなところにまで！？』と思う程、海も見えない街にも津波が押し寄せ街を破壊した跡を見させられました。この日はちょうど震災から5カ月目ということ、またお盆も重なっていたので、各地で灯籠や花火があげられていました。12日、早朝4時から、近くの農家へ赴き、お盆向けのお花の出荷作業を手伝いました。地元の方々との交流はとても有意義なものでした。地元の方々の感

情を肌で感じることができましたし、被災者と一口に言っても、様々な形の被災があるのだということに気づかされました。午後は田老地区を視察したり、近くの浜（浄土ヶ浜）を見に行きました。浜には石碑があり、チリ沖地震の際の津波のことや、以前の津波のことが記載されていました。

○移動式カフェ…やっとな最近になって、心の整理ができ、震災のことを話せるようになった、という方もいらっしゃいました。また、市役所で働かれている方は、こうして話せる機会は全くないので、とても楽になりました、と語っておられました。

○石碑から教えられたこと…地元には昔から、この地点から下に住むと津波が来た時に危険だ、という印があったそうです。昔この地域で津波にあった方々が、後世の人々に警告したのものでしょう。浄土ヶ浜を訪れた時も、一昔前の方が後世の人々に警告した石碑が建っているのが印象的でした。——私たちクリスチャンは、ある意味において、生きた石碑、もしくは、言い伝えを伝承する語り部、であると言えるでしょう。それは何千年もの間、人々に注意を促し、私たちが超えては行けない線を示し、どのように生きるべきかを伝え続けて来た、聖書、神の言葉を、人々に伝えて行くという使命があるからです。私たちクリスチャンは、神様が私たちに教えて下さっている教えを守り、そこに留まることを学び、そして人々に伝えて行く必要があるのだと感じました。



気仙沼聖書バプテスト教会（千葉仁胤牧師・単立）での奉仕 古谷恵実子神学生（経堂めぐみ教会）

8月12日～26日、この度、気仙沼聖書バプテスト教会の千葉先生にお世話になり、2週間の奉仕活動をしてきました。千葉先生は岩手県の大船渡聖書バプテスト教会も兼牧されており、岩手県と宮城県をまたいでの活動でした。大船渡と気仙沼は車で45分程の位置関係にあります。

○訪問、人との出会い

今回の私の主な活動は、千葉先生ご夫妻の活動の手伝いでした。先生方は、以前住まれていた地域の住民や教会員の家族、お孫さんが通った保育所等、以前からつながりのある人々で被災に遭われた方のいる避難所や仮設住宅を訪問し、物資を届けたりお話を伺う毎日を送っています。私もその訪問に同行させていただきました。

はしかみ ＜階上地区＞

千葉先生ご夫妻が以前住まれていた地域。長く住まれていたので近隣の方とはとても親しい関係。この地区は海に近いこともあり、被害が酷かった地域です。避難場所に避難した住民全員91名が津波に流され亡くなったそうです。避難所にいた方たちは逃げ遅れて近くの高台に辛うじて避難した方たちでした。現在も40名の行方が分からないそうです。ようやく仮設住宅への入居が決まり、皆さんの表情には明るさが見られました。

避難所ではなぜかお茶やお菓子を出され、こちらがおもてなしを受けてしまいました。少しでももてなそうとする姿勢に胸が打たれました。被災地の方に何かいただいたりするのは本当に申し訳なく心苦しかったのですが、何かお返しをしたい感謝を表したいというその心を感じ、ありがたくいただいていた。「受けるよりも与えるほうが幸いです」というみことばを思い出しました。私たちは自分が何かできることをして誰かに「ありがとう」と感謝された時、生きがいや私は存在しているのだと感ずることができるのではないのでしょうか。愛を受けたら今度は自分が誰かを愛していく、誰かのために生きる。人は、愛されるべき存在であり、愛するべき存在であることを学びました。

＜ヘルパー2級取得講座の手伝い＞

美佐子牧師夫人が長年市と行ってきた日本語教室の生徒さんたち（フィリピン、チリ、中国）で、今回の震災で職を失った方たち（漁業関係者）のために、東京のNPO団体と気仙沼市が就労支援を目的としたヘルパー2級取得講座を始めました。私は美佐子先生とともにこの講座の手伝いを2日間しました。気仙沼市の中央公民館は全館が被災し使えない状態なので、地域の小さな分館を拠点とし、講座を行っていました。フィリピンの方達は日常会話はできますが、読み書き特に漢字が大きな壁ですので、日本人ボランティアが一対一で付いてレポート課題をこなす、という感じでした。みなさんとても明るく人懐っこい方達ばかりでした。みなさん本当にがんばっていて、熱心に勉強していました。

＜山形からのお米・野菜配布＞

千葉先生の息子さんが山形で牧師をなさっていて、山形からお米や野菜を届けてくださいました。この食材を千葉先生が以前住んでおられた階上地区の小学校の仮設住宅で配布しました。お米にスイカ、メロン、きゅうり、じゃがいも、かぼちゃ、プチトマト、卵…などなど新鮮な野菜や果物に、みなさんとても喜んでくださいました。「このスイカでおばあちゃんの誕生日のお祝いができる」と本当に嬉しそうに話してくださいました方もいて、みなさんの笑顔がとても印象に残っています。

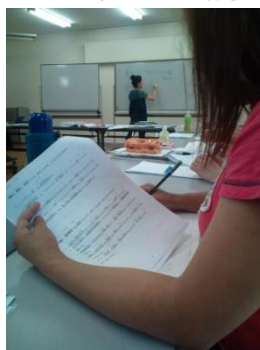
それぞれの仮設住宅には大分差があるようですが、この仮設住宅は2人につき5畳一部屋という割り振りでした。「やっぱり狭いね」とおじさんが口にしてました。



＜知的障害児のみんなとの出会い＞

気仙沼教会の教会員の方が働いている知的障害者入居施設でのボランティア。夏休みの間だけ、知的障害児を預かっての学童保育があるとのことでそちらのお手伝いをさせていただきました。この活動のために東京から知的障害者施設職員を集め、チームを組んで1週間交代でボランティアに来ていた方達と一緒に活動しました。やはり震災以降人手が足りないということで東京からの支援があり、職員の方達はとても助かっているようでした。2日間だけのボランティアでしたが、楽しいひと時でした。5～8人の、下は小学3年生から上は中学3年生までの子ども達でした。それぞれ障害の度合いもこだわりも違い大変でしたが、みんな純粋で可愛くてこちらが元気をもらいました。

全ての文章がふりがな付き



みんなとかく明るい→



<大船渡教会での奉仕>

大船渡教会では主に海水に浸かって錆びてしまったパイプ椅子のサビ取りと、教会裏の草刈り、奏樂者がいないということで、礼拝の奏樂の奉仕もさせていただきました。

<8月21日礼拝 気仙沼と大船渡で証しと賛美の奉仕>

この日は丁度長野の伊那福音教会からもボランティアチームが来ていたので共に礼拝の時を持ちました。礼拝では伊那福音教会の水野先生がメッセージ、伊那の教会の方の証しと賛美、私の証しと賛美と盛り沢山のプログラムでした。しかし全てに一貫して神様の憐れみ深い大きな愛が示され、証しを通して、賛美を通して、メッセージを通して、神様の愛が溢れていき、神様の愛で満たされる素晴らしい礼拝になりました。午後の大船渡の礼拝でも憐れみ深いイエス様、兄弟たちと同じようになられたイエス様のメッセージが語られ、私もその主の御跡を辿る者としてくださいと祈りをささげました。

<教会の皆様との交わり>

大船渡の教会員は4名ですが、それぞれの救われた証しを聞かせていただき、本当にそれぞれが神様によって捉えられ救われた軌跡を知り、遠く離れた地にあっても同じように働き救いへと導いてくださる神様を崇めました。

気仙沼の教会員の方達とはお宅や仮設住宅への訪問などで交わりを持たせていただきました。ある姉妹とは、私の証しを聞いてもっと話をしたいということで、お宅にお邪魔しさらに交わりを持つ時が与えられました。私の証しと賛美が用いられ感謝です。最後の祈祷会では暖かいプレゼントまでいただき、主にある兄弟姉妹として祈りで繋がり続ける者でありたいと願わずにはいられませんでした。そしてどうかまた顔と顔を合わせて恵みを分かち合う時を持つことができますように。

○神様から取り扱われたこと

<痛みに寄り添うイエス様>

気仙沼・大船渡を訪れた初めの頃は、被害の大きさを目の当たりにし、被災された方たちのお話を聞き、大きなショックを受けました返す言葉が無い自分に落ち込みました。彼らの痛みや悲しみを理解できない自分、寄り添うことのできない自分に出会いました。しかし2、3日してはたと気づかされました。初めから私はそんな心を持ち合わせていなかったということに。私が勝手に背負いこんでしまった重荷をイエス様に預けます、どうかあなたがこの痛みを担ってくださいと祈ってから私の心は軽くなりました。その後は、私には彼らに寄り添う愛はない、寄り添ってくださるイエス様の愛を私に教えてください、この心をその愛で満たしてくださりその愛が流れていきますように、と祈りつつ臨む奉仕でした。



気仙沼聖書バプテスト教会祈禱会 共に賛美した伊那教会の方↓



大船渡聖書バプテスト教会の皆様



<神様の愛は変わらない>

津波によって変わり果ててしまった気仙沼や大船渡。しかし神様の愛は変わらない、すでに与えられた十字架の犠牲の愛は変わらない、そのことを強く感じずにはいられない日々でした。変わらず注がれ続けているイエス様の愛を感じました。痛んでいるお一人お一人に神様の大きな憐れみ深い愛が必要だと感じました。毎日毎日、どうかお一人お一人が神様の愛を知り、受け取ることができますようにと祈らずにはいられませんでした。神様の変わらない深く大きな愛を聖日の礼拝を通して気仙沼・長野の教会員の皆様と共に味わうことができたのは本当に大きな恵みです。これからも教会の中に神様の愛が溢れ、その愛がこの世に流れて行きますように。

「大水もその愛を消すことができません。洪水も押し流すことができません。」 雅歌8：7

<キリスト者として歩み、世に出て行く>

今回の奉仕に一人で遣わされたことは私にとってとても大きな経験となりました。知らない土地にただ一人、一人のキリスト者として献身者としてしっかり立っていく訓練となったと思います。イエス様の愛を持って、聖霊に内を強められ、世に出て行くこと。それは私たちクリスチャン一人ひとりにも言えることですし、教会もそうであるのだと改めて気づかされました。震災を通して地域に出て行く機会を得た教会がイエス様の愛を持って被災した人々に寄り添い続けていくことが大事なのだと感じました。